

新島襄の木曾紀行

手塚 竜 磨

かねて予約購読中の『新島襄全集』三回目の配本が五月末に届いた。「日記・紀行編」で待望久しいものだった。明治期から邦人の手になる数冊の新島伝が刊行されたが、多くはJ・D・デイヴィスの名著を底本にしている、新島の日記をとりいれたものは少なく、したがって、帰国後の国内旅行の全容を伝えたものはなかった。「日記・紀行編」を手にし、むさぼり読んだが、もっとも感銘深かったのは、明治十五年七月はじめから九月中旬にかけての大旅行の記録で、その前後に試みられた伝道や大学設立資金あつめのための小旅行にはみられない紀行文としての体裁を整えたもので、名文で綴られている。

京都を出発して中仙道を安中まで通り、船便で先廻りしていた八重夫人を伴い、夫人の郷里会津若松をたずね、更に横井時雄と共に山形県の白布高湯におもむくという長期旅行だった。ここではそのなかでの一部、木曾路だけに限定して新島とその一行の足跡をあつづけてみたい。大正の後期から昭和初期にかけ四年間、教師としてすごした土地でもありてゆかり深いからである。

京都出発の際の同行者は五人。四十歳の新島は仲々の健脚で、だれにもひけをとらなかつた。京都で暗殺された小楠の長子、当時伊勢姓を名のる横井時雄は蒲柳の質で脚の旅は苦手だった。たまたま新島邸に泊っていた徳富猪一郎（蘇峰）と夏期休暇を郷里安中ですこすため一行に加わった湯浅吉郎（平月）、湯浅と同

じく上級コースで勉学中の奥亀太郎の三人は膝栗毛にたえられたが、下諏訪で別れ、甲州の家郷にかえる保坂七之介は最年少の在学生なのに胃弱でお荷物だった。

（中略）

いまから百余年も前のことで中央線もまだ開通しておらず、自然美も破壊されていなかった。米国で理学士の学位をうけている新島には地質・植物などのほか架橋工学についても理解があり、自然観察にもその片鱗がみられる。「実ニ絶景ト云ベシ」とたたえた小野の滝について、ふるくからあばれ川、橋杭のない芻橋（わづはし）で知られた滑川と滑川橋については次のように解説している。

「此川ハ源ヲ駒ヶ嶽ヨリ発ス、其流甚急ニシテ恰モ滝ノ如シ。橋ハ杭ナシ、双方ヨリ大木ヲカケ『アーチ』ノ如クナシ、其ノ上ニ橋ヲ架シタルナリ長サ二十間、水上ヲ離ル凡二十間、是モ亦奇観ト云ヘキナリ、此橋ノ作り方ハ何レヨリ習ヒタルヤ知ラサレトモ、少シク人智ノ開達ヲ徴スルニ足ル」

このあとに新島は自筆の橋と川のスケッチを添えている。このあたり、複雑線の開通や国道19号線の拡張でもはや「絶景・奇観」ではなくなつたが、新島の観察には歴史的価値が残されている。（後略）

〈此の文章は、去る一月三〇日に永眠された校友の手塚竜磨氏が『日本古書通信』第六六三号（一九八四・七・二五）に発表され、最後の御高著『頂きに憩う』（一九八四・二〇）に収録されており、絶筆にちかひものと思われる。その一部を掲載させていただいた。——本誌一六二ページ参照〉